
Primary Wave

式水 准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Primary Wave

【Nコード】

N2958P

【作者名】

式水 准

【あらすじ】

自然豊かな大小30余りの島々から成るラーガット公国は、資源確保や領土問題をめぐって2つの国と戦争状態にあった。ラーガット軍上層部は、なんとか和平の道を模索するが、事態は思惑とは違った方向に動いていき・・・!?

近代風の架空戦記です。ファンタジーではなく、戦車や戦闘機の世界になっています。

第一話 明日葉の夜明け(1)

一面厚い雲で覆われた灰色の空に、空襲の警報音が鳴り響いていた。その場にいた2人は、とりあえず目立ちにくい倉庫に隠れる。

「おい！本島からの船は来ていないのか！」

大きな鉄帽を深くかぶり、軍服に9つの勲章をつけた大男が叫ぶ。

「船は毎週来ています。先日も武器弾薬、さらには新型の自走砲まで配備されました。しかし食料の補給は全くありません。」

それに答えるのは、大男の隣にいる小柄で眼鏡をかけた男。よく通る声ではあったが、その表情は憔悴しきっており、眼鏡のレンズには小さなヒビが見えた。

「一体どうなってるんだ、こっちは明日の食うモンにも困ってる状態なんだぞ。」

倉庫には米と小麦の空袋が山積みになっていた。

「これはさつき北原参謀に聞いた話なのですが、どうやらセントラル本島司令はここ、南第3島を含めたアシタバ群島の破棄を計画しているようです。」

大男は何かを言おうとして、やめた。その代わりに、手に持っていた空袋を地面に叩きつけた。馬鹿な……。いまさら破棄などありえない。そもそもここを奪うためにどれだけの将兵が死んだと思ってる、いや、将兵だけじゃない、セントラルだって膨大な資金をつぎ込んでいたはず。今だって食料こそ無いが戦況は優勢に推移している。

「詳細はわかりませんがセントラルが破棄を検討せざるを得ないほどの理由なればやはり和平交渉の材料にする可能性が高いと思われます。宮本大尉も薄々気付いておられるのでは？」

そう言いながら眼鏡の男は倉庫の中に僅かに残っている穀物をかき

集めている。

確かにメヒルとの和平の可能性は自分でも感じていた。しかし食料さえ届けばアシタバでは間違い無く勝利できることも分かっていた。

この国 キヤラウェイ本島を中心とした海洋国家『ラーガット公国』は、現在2つの国と戦争をしている。一つは、同じく海洋国家でラーガットの南側に位置する『メヒル共和国』。もう一つはラーガットの西側に位置する『東部大陸連邦』（通称『ECF』）である。

ただしこの2国は互いに協力しあっているというわけではなく、むしろ疎遠である。つまりそれぞれ別個にラーガットと戦っている状態にあり、そのおかげでECFとの戦争は今のところ小康状態になっている。国際法上は戦争状態にあるものの、ラーガットとメヒルの全面戦争という見方が一般的だ。

しかし最近になってECFの動きが活発化してきているとの情報がある。自国の領土はすでに取り返している上に、これといった資源も無く、戦争の目的もはっきりしないメヒルとの消耗戦はこれ以上避けたいというのが上の正直なところだろう。

「農産物で最大の輸入相手国だったECFとの貿易が途絶えてから、国内の食糧事情はかなり厳しくなっているようです。苦肉の策としてセントラルは和平の条件に小麦の援助を盛り込むことも考えているらしいですよ。」

眼鏡の男は作業を終えてドアの方へ向かう。

「どこに行くんだ。」

「今日は一旦第1島の司令部に帰りましょう。明日の参謀会議は本島から高級指揮官も何人か来るそうです。最前線の代表として大尉も召集されていますので出席してください。しかも今日は夜になると

気温が氷点下まで下がるそうですし。」
そう言いながら2人で輸送用の小型のトラックに乗り込む。

道は殆ど舗装されておらず、トラックは絶え間なくガタガタと揺れている。宮本は、隣の席で悪路を上手く運転している男を見ているも密かに感心していた。向こうには軍港の灯りが見えてくる。

港に着いて第一島行き船に向かう途中、軍の連絡員がこちらに向かって慌ただしく走ってくる。息を切らせながら話す連絡員の言葉を聞いた瞬間、耳を疑った。

「ECFが・・・ECFがメヒル共和国に対して宣戦を布告しました!!!」

一瞬空気が止まり、また動き出す。

「何イ!?!」

第一話 明日葉の夜明け(1) (後書き)

ご意見ご感想等ありましたら是非お寄せ下さい

第二話 明日葉の夜明け(2)

ピピピッ ピピピッ

頭の上で何かが鳴っている。無意識のうちにそこにあるものを手に取り、音を止めてからゆっくりと元の場所に戻した。時計の針は8時を指している。

「……寒いな。」

ドアを開けて廊下に出ると、ひとり小柄な男が立っていた。よく見ると眼鏡が新しい。

「おはようございます、宮本大尉。」

隣を歩く男は、鳴海恵一なるみけいち。階級は少尉で、中央陸軍大学を出て軍歴2年目のエリートだが、嫌味な部分が全く無い珍しい男だった。

「新しい眼鏡になってるな。」

「はい、実は1ヶ月前から支給を申請していたんですが……やっと届きました。」

彼とは以前俺が隊長を務めていた中隊の中隊付幹部として一緒に戦っていた。今部隊は再編成中だが、主に2人で行動している。

「参謀会議は9時からです。それと、新しい辞令が出てますよ。」

そう言つて鳴海は、大きな判子の押された封筒を渡してきた。封を開けると、行書体の大きな文字が目に入った。

宮本真澄 殿

本日付で貴官を西方方面軍機甲独立大隊第2中隊長に任命する。

この辞令は宮本の予想に反していた。

「これでメヒルとの講和は確定的になりましたね。」

そう、確かにECF方面に異動というのは予想通りだった。昨日のECFのメヒルに対する宣戦で国内世論がメヒルとの和平に傾くのは確実だし、戦い続けるメリットも少ない。

「だが機甲独立大隊は開戦直後のECFとの戦闘で壊滅していたはずだ。しかもECFの対戦車砲の攻略は容易じゃないだろう」

「なんでもTG-15の後続戦車が遂に完成したようです。それに大尉は機械化歩兵の担当になっています。」

鳴海は手持ちの書類を捲りながら言う。

4年前に配備されたラーガット軍の主力戦車『TG-15』は戦前こそ圧倒的な性能ではあったものの、ECFの新型対戦車砲に手も足も出ず、過去の産物として扱われるようになっていた。ラーガット軍の象徴とまで言われた機甲独立大隊の再建は急がれたが、後続機の開発が難航し、結局ラーガットはそれまでの戦車を中心とした電撃戦から防御陣地での持久戦への転換を余儀なくされた。

「それに関しても参謀会議で色々と説明があるようです。」

2人は会議室へと急ぐ。

本島司令部

セントラルから来たであろう若い男が口を開く。

「・・・では、只今よりラーガット陸軍、及び海軍の参謀会議を行います。」

会場内はどこか重い空気に包まれている。

「最初に、今後のメヒル共和国との外交について、外務省より重大な報告があります。」

スーツを着た恰幅の良い男が前に出る。

「外務副大臣の榎原です。それでは今後の基本方針について説明させていただきます。まず、メヒル共和国にしましては領土の原状回復と、主要穀物の輸出を条件に和平交渉を進めており、明日には正式発表の予定です。それに伴い、現在我が軍が占領しているここアシタバ群島からの撤退を決定致しました。さらに、メヒル共和国との同盟も視野に入れて現在交渉中であります。」

個人的にはここからの撤退は微妙に納得いかなかったが、これ以上犠牲を出さないことには賛成だった。

「次に、大石参謀長より今後の戦略方針をお話いただきます。」
今度は大柄で風格のある男が前に出た。

「参謀長の大石です。陸軍につきましては現状の南方方面軍の約8割を西部戦線に投入し、新型戦車TG-25を含む機甲師団、及び独立大隊を中心として大規模攻勢を計画しております。海軍にしましてはメヒル共和国との和平のため、今後は主に陸軍の補助や、制海権の確保が主任務になるかと思えます。以上です。」
「では、その他の戦略につきまして」

司令部を出た後、少し離れた飛行場に向かっていた。

「あれじゃあ会議というよりまるで一方的な説明だな。」

「あんなもんですよ。参謀会議といっても形式だけのものですし。」
あの後簡単な会議はあったのだが、結局詳細な作戦内容は後日検討するということで参謀会議は終了した。

「西部戦線では厳しい戦いになりそうですね。」

「そうだな。正直ECFに対して大攻勢は難しいと思ってる。あの国は湿地と山岳が多いから、そもそも攻めにくいんだ。加えて兵器

の質も高い、場合によっては大敗も有り得ないわけじゃないが・・・
・・まあ、何とか頑張ろうや。」
不安も大きかったが、とりあえず前向きに考えることにした。

2人は西へ向かう輸送機へと乗り込む

第二話 明日葉の夜明け(2) (後書き)

ご意見ご感想等ありましたら是非お寄せ下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2958p/>

Primary Wave

2010年12月10日23時52分発行